

私の好きな春の言葉

日本語には、天候に関わる言葉が多い。四季の移り変わりがはっきりしていて、空や雨や風の表情が豊かだから、というのがその理由だろう。

が、逆に、豊かな日本語によって、私たちが自然のさまざまな表情を教えられることも多い。そんなふうに名づけられていなかったら、ただの空であり、ただの雨であり、ただの風としか感じられなかっただろうなあ、と思うことがよくある。言葉によって日本人は、自然の豊かさを、さらに美しいものにしてきたようだ。

例えば、「花曇り」という言葉がある。桜が咲く頃の、曇りがちの天気を表している。確かにその頃というのは、すっきりしない曇天が多い。

「せっかく花が咲いて、暖かくなってきたのに、あーあ、なんだか憂鬱な色の空だなあ。」

青空が大好きな私は、春になると何回となく、曇り空を恨めしく思う。が、あるとき、そういう空を「花曇り」というのだ、ということを知った。

「花曇り……なんて優しい響きの言葉だろう。」

そう思って空を見上げると、一面に広がる雲も、なかなか風情のあるものに見えてくる。われながら、おかしいくらいの変わりようだ。まるでそれらの雲は、強すぎる日ざしから、桜の花びらを守ってくれているようにさえ感じられる。あるときには、雲そのものが、空に敷き詰められたふかふかの花びらのようにも見えた。

「花曇り」という言葉は、憂鬱な空の色をそんなふうに変えてしまう魔法だった。

「菜種梅雨」もまた、私の大好きな言葉の一つだ。菜の花の咲く頃に、しとしと降る雨。夏前の本格的な梅雨ほどではないけれど、確かに雨が続くことがある。

もちろん雨よりも晴れのほうが好きな私は、この頃の長雨を快く思っていなかった。が、「花曇り」と同じように、「菜種梅雨」という言葉を知ってから、それほど嫌ではなくなった。

「今日もまた雨か……。しかたないわね。菜種梅雨なもの。」

「なたねづゆ」と口にしてみると、とたんに優しい気分になる。きっと菜の花は、この雨を喜んでいるにちがいない。いや、全ての植物が、この潤いを楽しんでいることだろう、と思われてくる。